

令和6年度 泉大津市立図書館協議会

■第2回会議の議事概要

日 時：令和6年9月17日（火）午後6時00分～午後7時45分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出 席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、高橋委員、谷合委員

公開の有無：公開

議 事

(1) デジタルアーカイブ（泉大津市ORIAM digital history）の活用について

議事概要

嶋田委員：本日は議題として、デジタルアーカイブの活用といただいているが、既にメール等で委員の皆さんには私から提案をしている。図書館協議会の2期が6月3日からスタートし、そのときに提案すべきだったと思うが、2年間の図書館協議会の議論や図書館の報告を受け、図書館活動を皆さんにもご覧いただき、第1期からの協議会としての評価や課題などを議論してはどうかと提案し、賛同をいただいた。是非みなさんからご意見をいただき、方向性と具体的な進め方を調整できればと思う。まず一つ目、評価・提言の出し方、まとめ方についてこの後、意見をいただきたい。二つ目、公表の方法と時期についても意見をいただきたい。今回私が提案させていただいたが、期ごとの公表とするのか単発とするのかを議論したい内容である。まず、一つ目の評価・提言の出し方、まとめ方についてはご意見をいただけないだろうか。

岡本委員：こういうことをやること自体、非常に良いことだと思っている。そのためにも明確にしておきたいのは、出したものが誰に渡されて、どう扱われて、どう記録として残っていくかということである。図書館協議会の法的位置づけにも関わるところで、図書館法にそもそも規程があるということと、どういう形態で設置するかは各自治体の条例によって定められるが、更にそこで出されたものをどのように扱うか。一般的に言えば図書館長の諮問機関であるので図書館内でということが往々にあるが、別にそこで閉じなければいけないという規程があるわけではない。実際に大阪府内だと近隣の自治体では図書館協議会がかなり強い声明を出したりするケースが、比較的47都道府県の中では多いほうだと思っている。当然それぞれの地域でさまざまに提言活動が行われているわけで、泉大津市としてもどのように提言なりを扱っていくのかは気になっている。そのうえで委嘱を受けている委員として希望を申し上げますと、最低限教育委員会内できちんと流通するものにしていただきたい。最低限やはり教育長がご覧になり、社会教育行政の中で教育委員会内ではこれがど

う扱われているかがきちんと記録に残るようにしていただきたい。そのうえで先のことに少し議論を進めて言うと、私は民間企業の立場だからこそ、ある種、最も説得力を持つことだと思って敢えて発言するが、この評価等にあたっては最終的には働いている方々の、雇用待遇に関知して一定の見解を示すべきであると強く考えている。最終的には、そこがゴールであると考えている。もちろん市民満足度の向上も重要であるが、それはかなり結果を出していると思う。最大の課題・懸念は、これが持続可能なものであるか、ということに尽きると思う。私も長くこの仕事をしてきて、数多くの事例を見てきたが、結局人の雇用の安定性がない限り、政策の持続性は絵に描いた餅に必ずなる。100%なる。この15年間、残念ながらそういう多くの事例を見てきた。Library of the Yearの大賞を取ったけれど、そのときの担当がいなくなれば元の本阿弥になってしまう。そういうケースが多々ある。そうしないために、それが泉大津の市民に対する重要な約束事であるだけに、やはり雇用等の待遇問題について、まずはこの段階での評価として落としどころとしたい。いろいろな議論をしつつ、最終的にこれを持続可能にするためには、誤解のないように言うと、今働いている館長や副館長、スタッフの方々個人の問題ではなく、とにかくこの仕組みが持続可能なものとして、10年20年、できれば30年程度の存続可能性を持ちうるためには何が、というところを落としどころとして議論していきたいし、個々の議論は最終的にはその持続性を担保とするのかというところに落ち着かせたい。その中で議論をして、そうでないと個々の小さな政策評価をしても埒が明かない。根本的にはこの街の価値を高めるためには、持続可能な仕組みをどう作れるのかを軸に話ができればいい。

谷合委員：タイトルは「持続可能な図書館運営を目指して」に決まったようなものである。評価を何のためにするのかという目的を明確にお話いただいたが、評価することの提案をいただいてもまだ白紙状態である。正直、何をどこから、というのを皆さん考えられたと思うので、きっかけをいただいて有難い。持続可能といったときに、日々の運営や働く人の労働環境、利用者目線で何を持続可能と見るか、など柱を立てて行って、ということだと思うが、評価というどうしてもABCや点数を言いたくなる。そういった点を含めて、どういう評価なのかを話す必要があると思っている。

岡本委員：桃山学院大学の司書講習課程の非常勤講師をしていて、先日私が担当している図書館政策論の科目があった。図書館政策について考える3日間の実践的な集中プログラムだ。そこに泉大津市民の受講生がいらした。まだ若い方で是非図書館で働きたいと言われ、シーブラの名前も出たが、ちょっと言葉に詰まった。いい図書館だが、雇用の継続性という点に関してはまだ評価が難しいところがあるので、よく考えて様々な選択肢を考えた方がいいと言わざるを得なかった。それは機会損失だと考える。せっかく地元で、と思っている人をみすみす逃してしまふ。そのときは大阪市や堺市など他の大都市を勧めざるを得ず、こういうことをしっかり捉えたほうがいい。同時にそれは谷合委員が言われた定量的・定性的な

評価の問題でもあると思う。雇用の問題でいえば、そういう声があるそういう人のニーズがあることを定性的な評価としてきちんと入れていったほうがよいと思う。と同時に、普通の描かれ方としてもこの図書館に対してどういう利用者の声があるのかを定量的な数値をきちんと観測的に取るのは極めて重要だが、と同時に定性的に見られているかということをきちんと評価していったほうがいい。先日、「ドキュメント 72 時間」というNHKの番組で石川県立図書館が描かれた。非常に評判を呼んだと思うし、あの番組の良さは 72 時間もの時間をかけて定性的評価を取りまくったということである。ああいうことは無駄ではないと思う。たぶん番組を見た多くの石川県民は「いい図書館があって、どうだ！」という顔になっただろう。その人たちからするとたぶん、県立図書館を維持する税負担というのは大いに納得感があるものだったと思う。その方々が納得するには、定量的な数値を持っていくら語るよりも、番組のインパクトは大きかった。ただしあの番組が成り立っているのも、例えば年間 100 万人以上が来ているという定量があったからこそ成立しているわけで、この両輪をしっかりと捕まえておく必要がある。ただ定性的にはどうやるのがいいか、というのは是非ディスカッションをしたい。

澤谷委員：「ドキュメント 72 時間」について言えば、石川県立図書館でなくともよかったのではないかと考えている。本当は泉大津市立図書館のようなところのほうが市民の日常をもっと明らかにできたのではないか。あのように撮影に入ってもらえる図書館はいいが、そういう図書館は石川県立図書館だけではない、と図書館員として番組を見ながら思っていたので、そういう定性的なことが評価に繋がるのであれば、是非そういった評価につながる取り組みをしていただきたい。また、持続可能性という点では、人と金とと思っている。人もお金に換算できるが、日本の人口は減ってきていて、貸出数もどんどん減ってくるだろうと思っている。そこを長期的にしっかりと見たうえで、サービスを継続できるような人とお金を確保して長く続けてやっていける仕組みを考えていくといいのではないか。

阿児委員：評価というところの具体的な、そして定性的な部分やデータは図書館でも取っていると思うが、やはり協議会として大事なのはそれに対してどのような提言、どのような視点を持って読み解くのが大事なことだと考える。そして、それをどれだけ協議できるかが、我々に課された課題である。そこで一つ、岡本委員から出た持続可能というキーワードをその視点で持った場合、協議会としてどのような提言ができるかは評価にも言い換えられるのではないか。博物館でも持続可能という言葉の捉え方はかなり難しいとされていて、同じことをずっと続けるわけではない。やはり、市民の声を取り込みながら運営を行っていく。常に拡大するわけではなく、濃淡をつけていくなども必要ではないか。そういうところも安定的に図書館を市民の場所としてどのように捉えていくのが、やはり大事なのではないか。ここで提言というのは難しいと思うが、私としては教育委員会の方々に意見をもらうことが大事だと考える。教育委員の方々が読むのはもちろんのこと、教育委員の判断

で市民にも公表するとなったときに、きちんと伝わる言葉で我々の提言をするほうがいいのではないか。できればそのように意識を持って協議をできればと思っている。

高島委員：一市民としては図書館のスタイルがいい方向に変わっていくのであればいいが、おそらくシステムや運営形態が変わるなどあるので、持続可能というところをベースにどう転がしていくかで、今回の評価・提言という話をいただき合点がいく。その中で個々の具体的などころまで今回出るかはわからないが、今までの協議会の中でも具体的な内容や図書館の未来に向けた大きな枠組みの話などいろいろ意見が出ていたので、これまでの協議会で出た提言を全部出してみ、それをどのように扱うのか。出された意見は実行できたのか、出た意見はどうなったのかは、市民としても知りたい部分ではある。また、皆さんが言われたように、利用する市民の声がこれからの運営に反映される流れをより一層強めていくシステムにして、定性的・量的にも定期的に取り入れていただきたい。

高橋委員：学校職員の立場でいうと、ここ数年、学校と図書館との関わりがすごく深まってきて、学校の様々な活動が前に進んでいるのをすごく実感している。読書活動はもちろんだが、今、中学校・小学校でも探究することが注目されていて、探究学習に対して図書館の在り方の重要性が非常に高まっているのを感じている。そこを市民にも知って欲しい。また評価の問題が出たが、本校でも評価について、数字や記号で伝えるほかにもっと温かみのある評価はないだろうか、とずっと議論している。わかりやすい評価として面白そうだと思っているのは、一人のこどもの変容をストーリーとして評価する方法である。例えば、調べる学習コンクールに出てくれたこどもが、このコンクールに出たことで自分が変わっていったことをストーリーに述べるのは、一つの評価になるのではないかとと思っている。

嶋田委員：提案いただいたようなポイントや柱立てを詰めていくための意見の出し方・まとめ方だが、例えば次回までにまとめられるよう、ある時期を締め切りとして皆さんから意見をメールでいただくのは可能だろうか。その際に意見のいただき方として、評価軸を決めていきたいがスケジュール的なことも案をいただきたい

阿児委員：やはりストーリーにまとめるという意見に共感できる。それぞれが見ている場面は違うだろう。シープラのこれまでの歩みや新たに読まれた場面など、ストーリーの一場面一場面があると思うが、それを寄せていくのは一つの手法である。「キミと、よみドキっ！」でもこういった場面が生まれるといいよね、というのがマンガにあったと思うが、実際に探究学習で似たような場面が生まれたとか、私だったらデジタルアーカイブが生まれたことによって変容が起きたと感じた。それが一定の評価になるのではないかと考えるときに、皆さんが気づいた場面やストーリーを寄せていくのは、私たちが提言する際にも取り組みやすい。次も持続してほしい、より進化してほしい場面や、新たに変わっていくのにも期

待する場面が見えやすいのではないか。この場合は何とかできなかつたらどうか？という課題も出てくると考える。

谷合委員：今まで図書館側から出されたデータがたくさんあるので、基本はそれを素材にして使うしかない。この評価をするために何かを調査したり、アンケートを取るなどは無理だろう。そうすると委員の中でも市民として、学校現場として、など見ているものが違う。他の委員は外部の目で見ているので、すり合わせをどうするのか。仮にだが、行政視点でどう見るか、図書館運営としてどうだったか、学校連携や市民として利用してきたか、など利用者・行政・働く現場のような柱立てをしたほうがいいのか。

岡本委員：阿児委員が言われたように、何か印象的な出来事について、それぞれが定量的・定性的な見立てを考える。よく年末に10大ニュースなどやっているが、泉大津市立図書館の1年のなかで非常に重要だった3つぐらいの出来事を全員がそれぞれの観点で選んで、それについて自分の立場からわかる範囲で記述するといいいのではないか。現実的にもそれならばできる。例えば高橋委員であれば、学校の現場から見える風景が少し変わった、というのはすごく重要な発言であり感銘を受けた。これを全学校で、先生一人一人で、など言い出すと評価疲れをするのは目に見えるし、そのようなアンケートが現場の教員に回ってくるのはまずい。そこは一人一人がそれぞれの立場で見た評価を、自分の立場を明示したうえですればフェアではないだろうか。私は事業者として連携協定を結び、実証実験をさせてもらっているが、その立場からどう感じたのか。泉大津市の対応も含めて赤裸々に書いてみる。これだけの委員がいれば、一人2、3個持ち寄るだけでも結構な数になる。それぞれの観点なので被りは気にしない。そのようにしてはどうだろうか。

嶋田委員：評価を考えたときに、図書館協議会の委員ではあるが図書館員の視点でしか見ていなかった。また、外部の視点でいただいた資料を客観的に見ようとしており、長きに渡ってどのように皆さんがエンパワーメントしたり、自分の人生を豊かにしようとしているかを感じるための努力を協議会の委員としてしなくてはならないと気付かされた。もし泉大津市民で委員をしていたら生活の中で図書館を感じることができると思うが、何か自分から一歩踏み込まないとできないということを感じた。

高島委員：質問だが、これを読むのは誰がメインターゲットなのか。もちろん誰でも読めるものではあるが、市民に向けての発信と行政に向けての発信では色合いが変わってくる。市民に向けて発信するのであれば、この図書館のいいところやもっと利用してもらいたいところ、使い方の提案など協議会で教わったことを発信したい。しかし、行政に向けて発信する内容であれば、力を入れて欲しいところなどの内容になる。誰に向けて、どういう形で発信するかを統一しておきたいが、どう考えておけばいいのか。

岡本委員：この協議会の役割としては行政でよいと考える。一つには館長の諮問機関ということを見ると、まず館長、或いは図書館職員に伝わるものであり、次いで教育委員会等に広がっていく。しかし最終的に、一般市民にわかりやすくするのは重要だと考えているが、そこは敢えて私たちの仕事ではないと思っている。それこそが行政の仕事であり、外部委員に頼むのは筋が違うし、何といても泉大津はそれを今まできちんと自分たちでやっている。「キミと、よみドキッ！」にしても子どもたちにわかりやすくするためにディスカッションをしてアイデアは出したが、それを実際に形にしたのは泉大津の皆さんである。そこはやはり行政側が手放してはいけない役割であり、外部に頼んでわかりやすくしてもらうのが流行っているが、住民と距離が近い街なので、そのコミュニケーションは自分たちで担ったほうがいい。学校の先生は子どもたちと向き合う仕事であり、そこは手放さない。だからこそ私たちは先生を信頼している。そのように住み分けを図るのがいいが、住み分けを図っている、期待をもっていることは是非明記したい。

嶋田委員：図書館協議会は館長の諮問機関であると同時に、自由に意見が言えるという2つのことが図書館法に書かれている。協議会としての発言は記録が取られており、公表もされて市民にも見てもらえているが、一つのまとめとして2年間の我々の気づきを協議会の責任において公表できないだろうか、という思いで提案をし、かなり具体的になってきた。ストーリーについては一人最大でいくつ出してもらおうといいだろうか。

岡本委員：一人最大3つぐらいであればちょうどいいのではないか。

嶋田委員：今、何かサンプルとして浮かんだストーリーはないか。

岡本委員：先ほど言ったようにシーブラと連携協定を結んで実証実験をやらせてもらった、というものでいいのではないだろうかと考える。一人一人もっとパーソナルでも構わない。

阿児委員：デジタルアーカイブ泉大津市 ORIAM digital history が作られて、市民がどう活用しているのかを追うのは難しいが、ワークショップを行って学校の先生が教材を作って広がっていく、というのは一つのストーリーではないか。具体的に泉大津のデジタル的な文化資源をどのように使っていくか、誰が使うのかを考え、講師を招いてワークショップを行ったのは一つのストーリーなのでもう少し客観的に見てみたい。私自身も教材作りのワークショップに参加したことがあるので、一例として評価できるのではないか。

谷合委員：委員としての反省だが、もっと頻繁にここに足を運ばなければいけないと感じた。私もデジタルアーカイブには関心が高いのでよく見ており、阿児委員が言われたように授

業の風景などの動画が出ていて素晴らしいと思うが、一方で改善点についてもいくつか考えている。またビジネス支援の面で、利用のされ方や今年度で出版が終わる資料をどうするのか、など気になっていて、どうしても資料論になってしまう。

澤谷委員：少し違うかもしれないが、来るたびに CO-ON で買い物をしたり、新聞やニュースで泉大津が出てると、私は泉大津市民ではないが気になる存在になっている。協議会委員とは離れているかもしれないが、ここに関わる一人としては変化だと感じていて、そのような変化を市民はもっと受けているのだろう。

嶋田委員：締め切りは 10 月 31 日としますのでよろしくお願いします。

(1) デジタルアーカイブ（泉大津市ORIAM digital history）の活用について
《主な意見等の内容》

デジタルアーカイブ（泉大津市 ORIAM digital history）の活用について事務局より報告

谷合委員：先日、桃山学院大学の司書講習授業でデジタルアーカイブの話をしたときに、市町村立図書館のデジタルアーカイブの事例として ORIAM digital history を取り上げた。短い時間だったので全部のコンテンツはとても紹介できなかった。基本は TRC-ADEAC を使っているの他の ADEAC とよく似た作りではあるが、泉大津市らしさはどこに表れているかを話していて、資料のコンテンツから活用までをちゃんと図書館が関わっているのはすごい。しかし ORIAM digital history はトップページを見ても、そもそもこれは何なのかかわからない。基本情報がわかるところが無い。誰が作っていて、どの部署が担当していて、そこに図書館がどう関わっているのかかわからない。ML 連携でやっているのであれば、図書館側はこの文庫のこのコンテンツを何万点出している、或いは〇月×日現在でコンテンツ総点数が何千点あります、などちょっとした基本情報がどこかにないと初めて見た人にはこれが何なのかかわからない。「歴史を見てください」と書いてあるが、実際のコンテンツは歴史だけではないので、全体像がざっくりとわかる説明がどこかに欲しい。そういうものがあれば、学生がいろいろなデジタルアーカイブを比較するときそれぞれの制作元も確認ができるので構造も見えてくる。利用者目線というよりは分析目線だが、そういうのがあれば嬉しい。

澤谷委員：久しぶりに見たらコンテンツが増えていたのでとても驚いている。楽しくておびんごのゲームをやってみたかったがうまく動かなかった。こどもが見ていても、地図が重なるものなどは面白いし、昔のことを考えるきっかけにもなるのではないかな。機械や出来上がったものなど工場の動画もとても素晴らしいが、もしできるならば、そこで働いている人た

ちの歴史や声をしっかりと残していただきたい。また、教育利用という仕組みなのだろうが、著作権も切れていると思われるものはオープンデータにしてほしい。

岡本委員：この取り組み自体、ここまで進展していて素晴らしいことなので、今後の飛躍のための課題として感じることを申し上げたい。澤谷委員も言われたように、やはり権利規定が堅苦しい。阿児委員が詳しいので後ほどフォローしていただきたいが、権利を主張する際に考えなくてはいけないことがいくつかある。一つは、そもそもその権利が果たして法として存在するのか。昨今問題になっているのは地方自治体が既に存在しない権利、もしくは元々存在しない権利を一方向的に主張しているというケースがある。もし該当するものであれば絶対に避けるべきである。なぜなら、地方公共団体が法に基づかない行為をしているということなので、それ自体が違法行為に等しい。もし該当すると思われる場合があれば、早急に是正すべきである。もう一つは広く伝わっていくこと自体が重要なわけで、権利の制限で言えることは、泉大津市のメリットにはほとんどならない。守られるメリットが特に何も無い。むしろ機会損失するほうが圧倒的に多いことを重視したほうがいい。大阪市立図書館は日本で精力的にやってきているので、是非大阪市レベルのものをやったほうがいい。大阪市も最初からすべてを完璧にできたわけではなく、時間をかけて緩やかにいい方向に変わってきているので、そこから学んで欲しい。また二つ目の点で、この仕組みがどれだけ持続可能なのが気になっている。構築費用等のイニシャルコストを自主財源で用意できる基礎自治体が果たしてどのくらいあるのかという問題があるので、特定の財団の資金にある程度依存するのはやむを得ないと思う。ただし、この場合課題だと少し感じているのは、この財団法人からの助成金が、やや関連企業とっていい企業の製品を使うこととセットになっているということが業界周知の事実と言っている。それが果たしていいことなのかは、公正取引の観点からして本当にいいことなのかは考えられるべきであり、継続性の問題ですと支援していただくわけにはいかないだろう。いずれ自主財源に切り替えて面倒をみていく日が出てくる。その時に、仕組みとしてどう自立的になるのか。極端な話をすればシステムを提供している事業者がそのビジネスをやめたとしても、デジタルで作り上げた資産は維持される必要がある。その仕組みができているか。デジタルアーカイブとしての持続可能性をちゃんと担保できているか、とても気になるところ。二十数年前からデジタルアーカイブというのは何度もこのような試みをして、その都度一回お終いとなり、そこからまた、となってきたが、そろそろここを脱却したい。是非泉大津市がいい先例を作してほしいし、他の事例をうまく踏まえてそこから学んでほしい。

阿児委員：取り組みとしては、立ち上げから収録コンテンツが増えてきて本当に素晴らしいと思っているし、学校や授業で活用いただくなど、まずパートナーとして先生方と一緒に作り上げていくということが明確になっているのも素晴らしいが、これらの成果は案内をいただいてわかったことである。谷合委員も言われたように ORIAM digital history が今

どのように歩んでいるのか、そもそもこのようなコンテンツを持っている、という紹介がないので案内がないとわからない。学校の先生に来てもらってワークショップをやったからこそわかるし、例えば生徒は知っていても自宅に帰って保護者に伝えたとしても、これを見ただけでは何もわからない。そうすると市民が蚊帳の外である。これは泉大津の皆さんに使ってもらうものであり、泉大津に関わる全国、世界の方々に使ってもらうものであれば、やはり最初の案内が必要だと感じた。二つ目として、登録の部分は権利の処理がすごく難しいと思うので、岡本委員も言われたように一気にやらなくていいので一つ一つ取り組んでいきたい。「ご利用にあたって」にも書いてあるが、朴斎文庫はすべてCCOが付いている、他は付いていないものもあるので一つ一つ付けているのだと思うが、そこを丁寧に書いたほうがいい。コンテンツごとに権利の形が違うので書くほうがいい。特に企業が営業しながら、その様子を撮影できているのは、公開されたくないような企業秘密の部分があっても、泉大津の声であり小学生たちに見てもらいたいからと、撮影を許してくれている部分がかかりあると思われる。普段は映してほしくないところでも、泉大津の方たちのために協力してくれていると思うので、明示されているほうがいい。また、持続可能性にも関わってくるが、作り込まれたコンテンツが多いことに少し不安が残る。一つ一つの動画も単独で見られるようにするほうがいい。毛布産業の工場見学のところ「全編を再生」などあると思うが、重複してもいいので動画のカテゴリに入れていただくほうがいい。児童・生徒が調べるときにこの場面を切り取りたいがどこにあるのだろう、というのが出てくると考えられるので、それぞれ素材がカテゴリに入って、組み合わせられてスペシャルコンテンツが作られているのがわかるほうがいい。きちんと個別の要素も残しておくシステムが無くなっても復活できる。システムの中で全部組み上げてしまうと、システムが変わってしまうとどうしようもなくなってしまうので、各素材・要素を集めてもらうのが大事である。三つ目としてだが、これは学校の先生の声も聞いていただきたいという要望である。関係各所や教材作りで使われていると思うが、「使いにくいのでは?」、と感じているのは画像が一つもダウンロードできないところである。どうやって教材作りをしているのか。営利目的としない教育利用はやっていい、と言いながらどう利用するのか。先生方は付箋をつけてアクセスして、毎回生徒に見せているのか。生徒が調べてまとめるとき、自分のギガスクール端末で調べたことに画像を貼りつけようと思ったときはどう貼り付けているのか。ちゃんと貼り付ける過程を確保するような仕組みが大事である。右クリックすればいい、というのは他のサイトではやっていけないことである。教育利用がOKだから書いているのではなく、正しい方法・手順をここで学んでもらうことが大事である。システムの制限もあると思うが、できれば今後想定していただきたい。適切にアクセスをして、適切に動画を見る。適切な利用手法はここをもって学んでいただく。今、学校ではかなり時間をかけてそれらのことを教えていると考える。ORIAM digital historyを使うことで権利の問題や素材を使う過程を学んでもらうのが情報リテラシーの育成になり、自然に学んでいけると感じたので検討していただきたい。

高橋委員：コンテンツが増えて学校は有難い話で、中学校でも活用を進めていきたいと考えている。今、市と連動したプロジェクト学習で泉大津市の隠れた仏像を探し出して一般公開する予定なので、文化財をこどもたちが知る機会としてもいいコンテンツだと思っている。

高島委員：久しぶりに ORIAM digital history を見て、コンテンツが増えたことに驚いた。この ORIAM digital history の 1 丁目 1 番地が学校教育で使われるようなアーカイブ作りということは踏まえたうえで、やはり泉大津市の文化財をアーカイブするという点をこれからさらに拡充していただきたい。動画で泉大津の無形遺産である飯之山神事や歌が上がっているが、泉大津市には我孫子踊りなど地区でしか伝わらない盆踊りや口承でしか伝わらない昔話もたくさんあり、急速に失われつつある。昔話のなかでここに暮らしていた人がどういったものを大事にしていたかなど、そういったものをアーカイブで形にしていくと誰でもアクセスできるので、アーカイブとしての役割を拡充していただきたい。

嶋田委員：コンテンツの収集や登録するときの市民参加のデザインについて現状や展望があれば聞きたい。

事務局：今後の展望については、これを見ると泉大津のことが分かる、ということを中心に大きな目標にしているので資料の数は増やしていきたいと考えている。令和 5 年度は学校に寄り添った活用やデータを増やすことを主眼にし、教科書に載っている資料と繋がるような泉大津の資料を出したので、いわゆる文化財という本当の歴史的な資料には若干疎かになった部分がある。とはいえ、田中家の文書は 1,000 点ぐらい増えており、似たような資料が多いためよく見ないと大きくわからないところではあるが、そのような歴史的な部分は大きくしていきたい。コンテンツの継続性に関しては、すべての資料データを業者に預けるだけではなく、文化財担当でもデータの複製は取っており、万が一業者がこの業務をやめることになった場合は、HP のページ構築は必要にはなってくるがすべてのデータが確実に守られる状況で進めている。先ほど高島委員が言われたように、市内に伝わる昔話や伝承を残したいと考えている。冊子にできないかと思っていたがなかなか難しいので、泉大津の昔話を取り上げてデジタルアーカイブに残したいので、情報提供をいただけると有難い。

谷合委員：せっかくなので、昔話は地元の泉州弁で読み上げたものをアップしてもらえるとすごくいいのではないかな。ほとんど失われつつある言葉なので、今残しておかなければ誰も喋れなくなるのではないかと危機感を持っている。

事務局：コンテンツの追加は全部文化財係がやっている。先ほども話したが、図書館で実施した「講座+調べる+まとめる」のときに、だんじりの資料を探すと大人向けに書かれたもの

が多く、また写真データはなかなか新しいものが無かったため、秘書広報課から近年のデータをいただいてカテゴリで分けて使ってもらうようにした。図書館としては広くコンテンツを集めてくるという部分で市民からもいろいろ集め、そして図書館が得意とする整理をして循環する仕組みが地道にできるといい。

澤谷委員：学校の授業などで子どもたちが作成したものもアップできるといいのではないか。またメタデータについても、市民に解説を入れてもらうことなどを活用して、是非追加してほしい。

阿児委員：澤谷委員の意見に関連してだが、今日の報告のなかで副読本の作成やワークショップで教材を作っているが、まだリンクが全くない。しかし ADEAC デジタルアーカイブシステムの S×UKILAM 連携のコンテンツからワークショップ成果「自治体版 WS の成果」を確認すると 12 教材できている。それがこのアーカイブから飛べないのはすごくもったいない。見ると非常に面白いのに ORIAM digital history からは行けない。元々が歴史的なものばかり集めているわけではないので、製作したもの、副次的に生まれてきたものをどんどん取り込んで、泉大津の関わるデジタル的な文化資源を集約する場所へ持って行くといいのではないか。それを取り込まなければ ORIAM digital history を使われた事例紹介報告書でも何も面白くない。使われた結果として生まれたものが ORIAM digital history の成長に繋がっているのが見えるほうがいい。

事務局：今年度も楠小学校と授業のワークショップを続けている。2 学期と 3 学期で実際に授業をした指導要綱やすべての先生が作成したものを ORIAM digital history に載せていく予定にしており、先生が作った授業を始めとする知の積み重ねをしていくと、見た人が助かるのではないか、ということ踏まえて進めていくことにしている。阿児委員が言われたようにトップページに S×UKILAM 連携についてリンクを貼るのはなかなか難しいため、ページの構成をどうするか正直悩んでいる。実は、スペシャルコンテンツ「探検いずみおおつ」に入っていて、一番下のところに「授業作りのために（教員向け）」でリンクを貼っている。学校の子どもたちや先生が最初に見るのはこのページではないかと想定したが、貼る場所に関しても悩んでいるのでアドバイスがあればいただきたい。

岡本委員：実際、利用した子どもたちの声はいかがだろうか。

事務局：授業を受けている子どもたちを見ていると、単に日露戦争のことを話してもどこか他所の世界の話のように聞いている。泉大津市内には日露戦争のときに亡くなったロシア人の墓地があり、小学校 3 年生で学校見学に行く場所である。日露戦争は 6 年生の授業なので、その頃には見学のことは忘れていたが、ロシア人墓地の写真を見せると子どもたちが

ハッとした表情になる。もちろん先生の技術もあるが、自分たちの近くに歴史があることに気づいた瞬間の表情の変化を横から見ていても感じる。ORIAM digital history を作ってよかったと実感し、こどもたちにとって自分たちが住んでいる泉大津と世界が繋がっていることをわかってもらえるメリットであり、非常にいい影響をこどもたちに与えていると思っている。

岡本委員：こどもたちを実験対象にするようで申し訳ないが、評価的には同じ教育課程の地域学習において、デジタルアーカイブがなかった時とデジタルアーカイブを使った授業と、どれだけ満足度の差が表れるか。体験の格差は相当のものなので、是非教育効果の差がどれぐらいあったのかを検証いただきたい。

嶋田委員：以前、瀬戸内市の図書館で、何十年後かに指定文化財になるようなものを、市民協働のイベントで募集をしたことがあった。将来すごいものになるかもしれないものをコンテンツ的に出してもらおうようなことが図書館でできるのではないか。

阿児委員：大網白里市は、同じく ADEAC でデジタルな文化財のアーカイブを作り上げてきて、登録博物館としての認定を受けた。デジタル資料が実際に博物館の収蔵資料としてみなされているので、目録が PDF でダウンロードできることが大事である。部分部分でいいのでそれぞれの目録を作っただけは、泉大津市のデジタル博物館として成り立っていくのではないか。また別の話だが、ここまで大きくなってくると泉大津の企業もデジタルアーカイブを使って何かしたいことが出てきているのではないか。二次利用や商業利用を希望される場合はお問い合わせください、とあったと思うが、商業利用の事例をどのように集めているのか、公表していく予定があるのかをおしえていただけないか。

事務局：残念ながら、今のところ商業利用の問い合わせはないが、毛布資料を寄贈いただいた企業から、自社の展示会で使用したいので資料貸出の申込があったが、貴重な布製品のため貸出することができなかった。代わりにデジタルアーカイブをスクリーンに映していただき、自社製品であることを伝えていただくことは可能である、と提案した。今後は事例の内容に合わせて考えていかないといけないと感じている。

岡本委員：佐賀県立図書館のデジタルアーカイブを作る仕事をしたが、海外からの問い合わせが意外に多いので、その可能性があるのではないか。図案などを見ても織物は世界的産業だが、織られるものに日本らしさが出る。大阪市のデジタルアーカイブもそこが面白い。そういう意味では、多言語対応を真剣に考えたほうがいいかもしれない。